

集団での上下関係規範と集団サイズが迷惑の 認知に及ぼす影響¹⁾⁻³⁾

尾関美喜*・吉田俊和*

The Effect of Senior-Junior Relational Norms and Organization Size on the Perception of Annoyance Behaviors

Miki OZEKI and Toshikazu YOSHIDA

The purpose of this study was to discuss the effects of organization size and senior-junior relational norms in perceiving annoyance behaviors. The following two hypotheses were examined; 1. In organizations with explicit senior-junior relational norms, annoyance behaviors by a junior would be salient. 2. In small organizations, annoyance behaviors would be perceived weaker than medium and large organizations. Two-hundred and thirty university students (118 male, 112 female) who belonged to a club participated in this survey. Results showed that Hypothesis 1 was supported. However, among the organizations with explicit senior-junior relational norms, members of medium organizations perceived annoyance behaviors more strongly than members of small organizations. On the other hand, among the organizations with implicit senior-junior relational norms, those in small organizations perceived them more strongly than those in large and medium organizations.

key words: annoyance behaviors, senior-junior relational norms, organization size

問題と目的

近年、社会規範が大きく揺らいでいる。特に若者の間で“自分に被害が及ばなければ、または相手が何も文句を言ってこなければ、何をしてもかまわない”“これだけたくさん人がいるし、どうせ誰も自分を見ていないのだから、何をしてもかまわないだろう”という風潮が広がっている。このような考え方をする人が、社会的な規範を考慮したり、自分の行

動が本当は相手にとって迷惑なのではないかと考えたりすることはまれだろう。

本来、規範やルールは、人間関係を壊すような争いの原因を最小限にするために行動を規定しているのである(Argyle & Henderson, 1985)。しかし、このような規範に反すると、その行為は迷惑とされる行為になる確率が高くなる。迷惑行為とは、職場や社会の規範を無視することや、相手の立場や状況、感情を考慮せずに自己の目的を充足させるための行

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
Department of Psychology and Human
Developmental Sciences, Graduate School of
Education and Human Development, Nagoya
University

1) 本論文は、第一筆者が2003年度に名古屋大学教育学部人間発達科学科に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。加筆・修正にあたってご助

言を賜りました名古屋大学大学院教育発達科学研究科の高井次郎助教授に記して感謝します。

2) 本論文の一部は、日本社会心理学会第44回大会で発表された。

3) 本研究における上下関係規範は、同じ部活動・サークルに所属する部員で、学年が自分よりも上か、同級生や自分より下の学年かどうかで異なってしまう、行為の意味づけの違いをさす。

為が、行為者の意図にかかわらず、周囲の人に迷惑として認知されることで生起する。このような行為は時として、周囲の人との関係を悪化させる原因になる可能性がある。特に集団という文脈では、迷惑行為が生起することによって、集団の活動が阻害されたり、人間関係が悪化することで、成員の当該集団へのコミットメントが低下したりするといった影響の可能性がある。

吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折(1999)は、迷惑行為を“行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為”と定義した。そして、自分にとって極端に迷惑である(迷惑でない)行為は、他者にとっても迷惑である(迷惑でない)と推定する傾向が示唆され、同時に自分が実際に感じるよりも、他人はより迷惑に感じると人々が認知する傾向があることも示した。このことから、自分が迷惑を直接に被らない場合でも、ある行為を迷惑なものであるか判断できるといえる。

石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉(2000)は、ある行為を迷惑として判断する際に用いられる視点は、“個人”“周囲の他者”“社会・公共”“ルール・規範”の4つのカテゴリーに大別し得ることを明らかにした。“個人”に関する言及は迷惑か否かの判断にマイナスの影響を、逆に“周囲の他者”“社会・公共”“ルール・規範”に関する言及はプラスの影響を有していることも明らかにした。ここでいう“個人”とは自分の立場のみから判断することであり、具体的に言えば“自分が不快に感じるか否か”ということである。また“周囲の他者”とは、その状況に居合せる周囲の他者や特定の他者が不快に感じるかどうかを基準に判断することである。“社会・公共”は社会全体の利益や公共性という観点から迷惑かどうかを判断していると考えられるものである。考慮される範囲がその状況に居合せる他者や直接被害に遭う他者に限定されない点が、“周囲の他者”と異なっている。“ルール・規範”はルールやマナー、規範に関する言及がなされ、その基準との関連によって迷惑かどうかを判断しているものである。つまり、ある個人がある行為について迷惑か否かを判断するとき、自分が迷惑に感じるかどうかよりも、むしろ周囲の他者を考慮に入れて

いることがわかる。これらの研究からも、実際に自分が被害を受けるかは別として、行為そのものが迷惑かどうかを判断することが可能であると考えられる。

吉田ら(1999)および石田ら(2000)で扱われた社会的迷惑行為は、不特定の行為者対不特定の相手間で生起するものであり、行為そのものが迷惑かどうかを判断させるものであった。しかし、ある特定の状況下で迷惑行為が生じた場合の迷惑の認知は状況に依存するであろう。例えば集団内での迷惑行為であれば、集団内での人間関係が影響を及ぼすことがあると考えられる。一般的にその行為は迷惑であっても、“後輩がやったことなら仕方がない”“先輩の言うことなら従わなければならない”というように、行為の遂行者と認知者との関係によっては迷惑と感ずる強さが変化することもあるだろう。このように、上下関係が明確な場合では、行為者と認知者の上下関係が迷惑の認知に影響を与えていると考えられる。

この点については、勢力の文脈で考えることができる。例えば高地位者が低地位者に、一般的には迷惑なことを頼むでしょう。しかし“高地位者の命令や頼みを聞かなければならない”という集団規範が内在化されている場合、その行為を迷惑と感じる強さが、同地位者や低地位者に頼まれる場合と異なることが多い。これは高地位者の側に正当勢力が存在しており、高地位者がこれを利用して低地位者に対して影響を及ぼすからである。

Lippitt, Polansky, Redl, & Rosen (1952)は、集団内で低い勢力を帰属された者は、高い勢力を帰属させられた者に、より多くの服従的行動をとることを余儀なくされることを明らかにした。したがって、上下関係が明確な場合には、低地位者はより服従的な態度を表面的にはとると考えられる。このような低地位者の態度を習慣的に目にした高地位者は、自分の行為を迷惑として認知することが少なくなる可能性がある。高地位者の側では“低地位者は自分の言うことをやって当たり前”という態度が自分の行為を迷惑なものとは判断できなくさせており、自分がしたことによって相手が迷惑を感じているか否かを考慮しなくなっていると考えられる。以上のような状況が日常的なものとなり、“低地位者は高地位者に従う”という形で規範化すると、今度

は高地位者に従わないことは規範を無視する行為となり、今まで迷惑行為だったものが迷惑として認知されなくなるだろう。それゆえ、本研究では集団内における上下関係の明確さを要因のひとつとして取り上げる。

集団内での迷惑認知に影響する今ひとつの要因として、本研究では集団サイズを取り上げる。Markham, Dansereau, Jr. & Alutto (1982) は、職場集団の無断欠勤 (absenteeism) に関する研究を行い、職場の監督部門では無断欠勤と集団サイズとの間に有意な正の相関があることを示した。つまり、集団が大きいほど無断欠勤の発生率が上昇するというのである。大集団では小集団よりも相対的に構成員ひとりひとりにまで目が行き届きにくい。そのため“これだけ人がいるのだから、自分ひとりが欠勤したところで差し障りはないだろう”と考えて欠勤する人間の数が増え、無断欠勤の発生率が上がる可能性がある。反対に小集団であまり無断欠勤が見られないのは、無断欠勤が大集団よりも他者の注意をひくであろうし、実際に他の成員の負担を増加させやすいからである。すなわち、無断欠勤は他者に迷惑をかけるという規範が共有されやすい。

集団サイズについては、社会的インパクト理論から説明することも可能である。社会的インパクト理論においては、ある行為のターゲットが増えるにつれて、ターゲットが受けるひとり当たりの影響は小さくなる (Latané, 1981)。これを集団における迷惑認知の文脈に置き換えると、小集団で迷惑行為がなされる場合の方が、大集団よりも被害を被る人数が少ないが、一人当たりには強いインパクトがある。したがって、小集団の成員の方が、大集団の成員よりも強く迷惑を認知すると考えられる。

以上の点を踏まえて、本研究では大学生の部活動・サークル集団を対象として、一般的で日常的に生じやすいと考えられる行為について検討する。上下関係の明確な大集団、上下関係の不明確な大集団、上下関係の明確な小集団、上下関係の不明確な小集団の4つの集団間で、行為者が高地位者、同地位者・低地位者それぞれの場合について、各集団の成員が認知する迷惑の程度を比較し、以下の2つの仮説を検討する。

仮説 I 上下関係の明確な集団の成員は、上下関係の不明確な集団の成員よりも、高地位者による迷

惑行為の迷惑度を弱く認知する。

仮説 II 小集団の成員は、大集団の成員よりも迷惑行為の迷惑度を強く認知する傾向が強い。

予備調査

方法

予備調査の目的は、どのような行為が迷惑として認知されるかを調査することであった。

2003年1月上旬から下旬にかけて愛知県内の国公立大学の大学生と大学院生に質問紙を配布し、回答に不備のない217名(男子65名、女子151名、不明1名)の回答を分析に使用した。回答者の学年は1年生と3年生が多く、2年生と4年生もいた。このうち部活動・サークル活動の経験者は162名であった。

回答者は最初に部活動・サークル所属経験の有無を回答した。その後、経験者は所属経験のある団体の人数、活動日数を記入した。次に経験者は先輩・後輩関係の明確さを評定する10項目の質問に、“あなたの所属経験のあるサークルまたは部活の状況についてお尋ねします。”という教示のもと、“4 よくあてはまる”“3 ややあてはまる”“2 あまりあてはまらない”“1 全くあてはまらない”の4段階で回答した。

迷惑行為については、大学生を対象としたインタビューで集めた迷惑行為に、独自に考えた迷惑行為を付け加えて、心理学専攻の大学院生3名とともに、項目を作成した。これらの迷惑行為について回答者全員に、“サークルまたは部活動に所属した経験がある方は、自分が最も最近まで所属していた団体についてお答え下さい。所属した経験のない方は、自分が所属していたら、と想像してお答え下さい。”という教示を行った。続いて“あなたの所属する部活動やサークルで次のような行為をする人がいます。あなたはその行為をどれくらい迷惑だと感じますか。あなたの所属する団体にあてはまらない状況もあるかもしれませんが、その場合はもしあなたの所属する団体がその状況だったら、と想像して答えてください。”という教示のもと、回答者は45項目の迷惑行為の評定を“5 とても迷惑である”“4 やや迷惑である”“3 どちらでもない”“2 あまり迷惑ではない”“1 全く迷惑でない”の5段階で行った。

結果

先輩・後輩関係を尋ねる項目について因子分析(主因子解, varimax 回転)を行った結果を Table 1 に示した。固有値の減衰状況は順に 4.01, 0.96, 0.90 であったため, 1 因子構造であると判断し, この因子を, “上下関係の明確さ” ($\alpha=.83$) と命名した。

迷惑行為についても同様に得られたデータをもとに因子分析(主因子解, varimax 回転)を行った。この結果, 固有値の減衰状況は順に 11.51, 2.66, 1.56 であったことから, 1 因子構造であると判断し, この因子を, “部活動・サークルで生起する迷惑行為” ($\alpha=.94$) と命名した。この結果を Table 2 に示した。

本 調 査**方法**

予備調査では, 本来実際に部活動・サークルに現在所属している回答者のデータのみを分析に使用するべきであったが, 部活動・サークル活動で生起する迷惑行為の因子分析において回答者数と因子分析する項目数の関係で, 所属経験のない回答者のデータも因子分析に使用せざるをえなかった。その結果 1 因子であることを確認したが, 項目の中には迷惑行為の迷惑度そのものを評定する項目だけでなく, セクシャルハラスメントや“どのような人が迷惑な人か”を評定する項目が入っている。加えて, 誰を想定して迷惑度を評定したのかわからないという問題があった。以上の点を踏まえて本調査を行った。

調査対象者 2003 年 6 月から 7 月にかけて, 大学の部活動またはサークルに所属している大学生 230 名(男子 118 名, 女子 112 名)が対象となった。部活動・サークルの活動時間の前後に質問紙を配布し, 質問紙調査を行った。なお学年の内訳は, 1 年生 61 名, 2 年生 91 名, 3 年生 50 名, 4 年生 25 名, 大学院生 3 名である。

質問紙の構成 回答者は, まず自分が所属する部活動・サークルで普段活動している人数を回答した。

続いて先輩と後輩の関係について, 予備調査で用いた上下関係の明確さを測定する尺度 9 項目について, “あなたの所属するサークルまたは部活動の状況についてお尋ねします。”という教示文のもとに, 自分の所属する部活動ないしサークルにおいてどれぐらいあてはまるかを“4 よくあてはまる”“3 ややあてはまる”“2 あまりあてはまらない”“1 全くあてはまらない”の 4 段階で評定した。これらの項目の平均値を算出し, 平均値以上であった回答者を, 自分の所属する集団が上下関係の明確な集団と認知しているものとし, 平均値未満であった回答者を, 自分の所属している集団が上下関係の不明確な集団と認知しているものとした。

続いて, 予備調査で使用した, 部活動・サークルで生起する迷惑行為の中から, 活動そのものに直接関係があると考えられる項目だけを抽出し, 新たに大学生からインタビューで集めた項目を付け加え, 心理学専攻の大学院生 1 名とともに合計 31 項目を作成した。これらの項目について, ①迷惑行為の行為者が同級生・後輩である場合について, “あなた

Table 1 先輩・後輩関係について尋ねる項目の因子分析

	F1	共通性
先輩の言うことには従わなければならない	.82	.68
先輩に口答えできる雰囲気ではない	.76	.58
準備など雑用をするのは後輩の仕事である	.74	.55
先輩には敬語を使って話す	.62	.38
活動中は先輩優先で事が進むことが多い	.61	.36
先輩に会ったときは挨拶することになっている	.59	.35
後輩の面倒をみるのは先輩の役目である	.49	.24
先輩が後輩のやることに口出しすることが多い	.45	.20
何となく同じ学年どうしでかたまっていることが多い	.35	.12
2 乗和		3.46
寄与率 (%)		44.50

Table 2 部活動・サークルで生起する迷惑行為の因子分析

	F1	共通性
何でも他人にやらせようとする	.66	.43
遊びや飲み会に強引に誘う	.66	.43
話し合いの結論を出さなければならないときに、自分の意見を押し通そうとする	.65	.42
集合時間に遅れて来る	.64	.41
他人の失敗をネタにしてその人をからかう	.62	.38
場を考えずに性的な話をする	.60	.36
共用の道具を独占する	.60	.36
人のプライバシーに関わることを好んで知りたがる	.59	.35
連絡事項を伝えた後、関係ないことをいつまでも電話で話し続ける	.57	.33
道具や備品を借りたまま返さない	.57	.32
自分のミスを認めようとししない	.56	.32
係の仕事の引継ぎをきちんとしない	.56	.31
話し合いの最中に関係無いことを近くににいる人としゃべる	.55	.31
自分の思い通りになるように裏工作をする	.55	.30
準備が終わった頃を見計らって活動に来る	.55	.30
仕事があるときにかぎってその場にはいない	.55	.30
共用の道具を独占する	.55	.30
話し合いの最中にかかってきた電話で、いつまでも話し続ける	.55	.30
帰りたいような様子の人をいつまでも引き止める	.55	.29
話し合いなどを含む活動に参加しない	.54	.29
集合時間の変更を直前になって伝える	.54	.29
片付けや準備を手伝わない	.52	.27
無断で活動を休む	.52	.27
計画性に欠ける企画を打ち出すこと	.51	.26
お金がないからと他人におごらせる	.51	.26
異性とみたら見境もなく口説く	.49	.24
ごく少数の人にしか通じない話を、わからない人の前でする	.49	.24
酔って異性からむ	.48	.23
他人の体の一部にべたべた触る	.48	.23
失敗を他人のせいにする	.48	.23
他人に変わったあだ名をつけて、そのあだ名で呼ぶ	.48	.23
既に決定された事に対していつまでも文句を言う	.47	.22
連絡をまわさない	.46	.22
その場にはいない人のうわさをする	.46	.21
秘密をすぐ人に話す	.46	.21
内部情報を外部にもらさず	.46	.21
断りもなくタバコを吸う	.45	.20
2乗和		10.83
寄与率 (%)		29.30

の所属する部活動やサークルの同級生・後輩が次のような行為をしています。あなたはその行為をどれぐらい迷惑だと感じますか。あなたの所属する団体にあてはまらない状況もあるかもしれませんが、その場合はもしあなたの所属する団体がその状況だったら、と想像して答えてください。”②迷惑行為の行為者が先輩である場合について、“あなたの所属する部活動やサークルの先輩が次のような行為をしています。あなたはその行為をどれぐらい迷惑だと感じますか。あなたの所属する団体にあてはまらない

状況もあるかもしれませんが、その場合はもしあなたの所属する団体がその状況だったら、と想像して答えてください。”という教示を行った。これらの教示のもと、回答者は31項目の迷惑行為の迷惑度を“1 全く迷惑でない”“2 あまり迷惑ではない”“3 どちらともいえない”“4 やや迷惑である”“5 とても迷惑である”の5段階で評定した。

結果

調査対象となった団体ごとに得られた回答から、所属する集団の人数について最小値、最大値、平均

値, 標準偏差を Table 3 に示した。

調査の対象になった各団体の代表者にインタビューを行ったところ, 最大値が 50 人未満の集団であれば, 代表者とそれ以外の成員でも集団の人数を比較的正確に把握していたが, 50 人以上では代表者が正確な人数を把握しているものの, それ以外の成員は, 数えてみないと正確な人数を把握しにくいということであった。また 100 人以上の集団では, 代表者さえも正確な人数を把握しておらず, 集団の成員が書いた人数は最大値と最小値で 100 人の差があった。したがって, 分析では集団サイズについて代表者による人数の報告が 50 人未満の集団を小集団, 50 人以上 100 人未満の集団を中集団, 100 人以上の集団を大集団とした。具体的には, サークル 1, 3, 8 が小集団, サークル 4, 6, 7 が中集団, サークル 2 とサークル 5 が大集団に分類された。

項目の因子分析 上下関係の明確さについて因子分析 (主因子法, varimax 回転) を行ったところ, 固有値の減衰状況は順に 3.50, 0.85, 0.71 であったことから, 1 因子構造であると判断し, この結果を Table 4 に示した。なお $\alpha = .83$ であった。

Table 3 各団体に報告された普通の活動人数

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
サークル 1	20	35	27.5	4.70
サークル 2	50	130	92.2	20.86
サークル 3	30	40	34.6	2.74
サークル 4	40	50	42.4	2.05
サークル 5	100	200	125.0	26.14
サークル 6	50	66	55.6	5.68
サークル 7	55	80	69.5	5.74
サークル 8	15	30	20.5	3.50

また部活動・サークルで生起する迷惑行為については, 同級生・後輩が行為者である場合の回答をもとに因子分析 (主因子法, varimax 回転) を行ったところ, 固有値の減衰状況は順に 9.19, 1.54, 1.30, 1.18 であったため, 1 因子構造であると判断し, “部活動・サークルにおける迷惑行為” ($\alpha = .93$) と命名した。因子分析の結果から, 31 項目のうち因子負荷量が .40 未満のものを除外し, 25 項目で尺度を構成した。この結果を Table 5 に示した。先輩が行為者である場合の回答についても同様の因子分析を行ったが, 同じく 1 因子構造であり, 因子を構成する項目もほぼ同じであった。

上下関係の明確さ 上下関係の明確さについて基本統計量を算出したところ, $M = 17.3, SD = 4.54$ であった。そこで平均値より低いものを自分が所属している団体を上下関係が不明確な集団として認知し, 平均値以上であったものを上下関係が明確である集団として認知しているものとした。

続いて集団サイズごとに, 上下関係の明確さについて 1 要因分散分析を行った (Table 6)。この結果, 有意な差があることが示されたため ($F(2, 227) = 20.52, p < .001$), 続いて多重比較 (Bonferroni 法) を行った。この結果, 小集団は大集団と中集団よりも上下関係が不明確であることが示された。

迷惑の認知 迷惑行為の評定について, “部活動・サークルにおける迷惑行為” の合計尺度得点を従属変数とし, 行為者 (先輩, 同級生・後輩) \times 集団サイズ (大, 中, 小) \times 上下関係の明確さ (明確, 不明確) の 3 要因混合分散分析を行った。行為者が被験者内要因であり, 上下関係の明確さと集団サイズは被験者間要因である。行為者 \times 上下関係の明確さについて有意な交互作用が見られ ($F(1, 224) =$

Table 4 上下関係の明確さについての因子分析

	F1	共通性
準備など雑用をするのは後輩の役目である	.75	.57
先輩に口答えできる雰囲気ではない	.73	.54
先輩の言うことには従わなければならない	.73	.53
先輩に会ったときはあいさつすることになっている	.66	.43
先輩には敬語を使って話す	.64	.41
部活中は先輩優先で事が進むことが多い	.49	.24
何となく同じ学年どうしでかたまっていることが多い	.49	.24
2 乗和		2.96
寄与率 (%)		42.29

Table 5 部活動・サークルにおける迷惑行為についての因子分析

	F1	共通性
活動にあまり参加しない	.72	.52
集合時間に遅れてくる	.71	.50
話し合いに参加しない	.70	.49
途中で帰ってしまう	.68	.48
準備が終わった頃を見計らって活動に来る	.66	.43
仕事があるときにかぎってその場にはいない	.65	.42
活動に来ているのにこれといって何もしない	.64	.41
よく遅れてくる	.64	.41
話し合いの最中に関係ないことを近くに人としゃべる	.63	.40
片付けや準備を手伝わない	.63	.40
意見を求められても、意見をあまり言わない	.63	.40
無断で活動を休む	.61	.38
活動中に他のことをする	.61	.37
他の人と違った行動をする	.59	.35
準備や片付けに時間がかかる	.56	.31
私語が多い	.55	.30
皆のやる気をなくすようなことを言う	.54	.30
話し合いの最中にかかってきた電話で、いつまでも話し続ける	.54	.29
道具や備品を借りたまま返さない	.53	.28
連絡をまわさない	.48	.23
部費や合宿費などのお金を払うのが遅い	.47	.22
計画性に欠ける企画を打ち出す	.43	.19
集合時間の変更を直前になって伝える	.43	.18
内部情報を外部にもらさず	.42	.18
共用の道具を独占する	.40	.16
2乗和		8.60
寄与率 (%)		34.40

Table 6 集団サイズごとの上下関係の明確さについての分散分析

	小集団	中集団	大集団	F 値	
上下関係の明確さ	14.9 (5.44)	19.3 (3.96)	17.8 (3.02)	20.52***	小集団<大集団, 中集団

*: <.05, **: <.01, ***: <.001

上段 平均値 下段 標準偏差

4.26, $p < .05$), 集団サイズ×上下関係の明確さについても同様に有意な交互作用が見られた ($F(2, 224) = 13.59, p < .001$). 各要因の主効果については, 行為者について有意な主効果は見られなかった ($F(1, 224) = 2.87, ns$). 集団サイズについても有意ではなく ($F(2, 224) = 2.60, ns$), 上下関係の明確さについてもまた有意ではなかった ($F(1, 224) = 0.47, ns$). 行為者×集団サイズ×上下関係の明確さについて有意な交互作用が見られ ($F(2, 224) = 6.75, p < .01$), 先輩による迷惑行為が, 上下関係の明確な小集団では有意に弱く迷惑と認知されることが示された (Figure 1)。

下位検定の結果, 行為者×上下関係の明確さの交互作用は有意であり, 上下関係の明確な集団では, 行為者が先輩の場合に, 同級生・後輩の場合よりも迷惑度が弱く認知されることが示された (Figure 2)。

集団サイズ×上下関係の明確さの交互作用が有意であった。続いて上下関係の明確さについて行った多重比較 (Bonferroni 法) の結果, Figure 3 に示したように, 上下関係の明確な集団では, 中集団の成員が小集団の成員よりも有意に強く迷惑度を認知し, 上下関係の不明確な集団では, 大集団の成員と中集団の成員よりも, 小集団の成員の方が有意に強

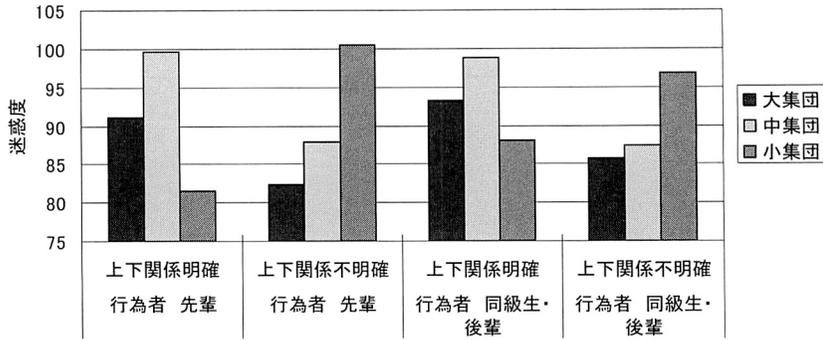


Figure 1 行為者、上下関係の明確さ、集団サイズの3要因分散分析結果

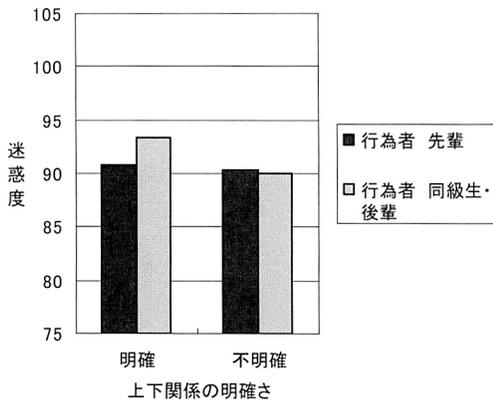


Figure 2 上下関係の明確さと行為者ごとの迷惑度評定

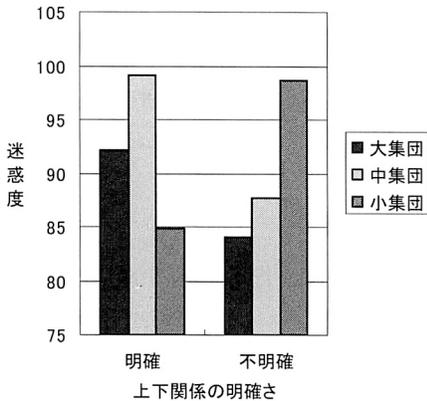


Figure 3 上下関係の明確さと集団サイズごとの迷惑度評定

く迷惑度を認知していた。また集団サイズ別に見ると、大集団と中集団では、上下関係の明確な集団の成員の方が有意に迷惑度を強く認知することが示された。しかし小集団では、上下関係の不明確な集団の成員の方が有意に強く迷惑度を認知することが示

された。

考 察

仮説 I について

上下関係の明確な集団では、先輩（高地位者）による迷惑行為が同級生・後輩による迷惑行為よりも迷惑度を認知される程度が弱いという結果より、仮説 I は支持された。

上下関係が明確であるということは、先輩の正当勢力が規範によって守られていると考えられる。上下関係の明確な集団では、先輩と後輩の区別が明確であり、先輩の勢力が強いため、先輩による迷惑行為の迷惑度は同級生や後輩の場合ほどは強く認知されない。

Hollander (1958) は、特異性信用状 (idiosyncrasy credit) という概念を提唱した。特異性信用状は、リーダーが逸脱行為をする際に、その集団のサイズや機能に関係なく、集団に所属する個人が、それぞれある状況下で集団の制裁を受ける前に、特異な行動をとることが許されるような、集団から与えられた信頼の程度のことである。本研究では、上下関係の明確な集団においては、先輩による迷惑行為の迷惑度が同級生・後輩による迷惑行為ほど強く認知されなかった点で、この理論と合致していた。しかし、同級生・後輩（低地位者）は、上下関係の明確な集団では弱い立場である。集団の中では、十分な信頼を得ていない場合には逸脱行為がネガティブなものともみなされやすいために、集団の新参者は影響力を行使したり革新的行動をとったりするには弱い立場にあるとされる (Hollander, 1978)。後輩が集団の新参者であるといえるのは、大学生の部活動・サークルでは短期間かもしれないが、相対的低

地位者と考えることはできる。特に同級生や後輩が、先輩によって遵守されている規範を意図せずに逸脱してしまうと、その逸脱行為は、規範を内在化している先輩の側からは迷惑な行為と認知されやすいだろう。そして上下関係の明確な集団では先輩の正当勢力が強いために、先輩が迷惑だと判断すれば、それが他の成員にも影響を及ぼす形で迷惑と認知される程度が強くなると考えられる。

しかし、上下関係の不明確な集団では先輩、同級生、後輩の線引きが不明確であるため、地位の違いがあまりない。集団によっては、学年が異なっているだけで、先輩、後輩という扱いはせず、ほとんど等質ということもありうる。このことから、上下関係の不明確な集団では、先輩による迷惑行為と同級生・後輩による迷惑行為とでは、集団の成員が感じる迷惑の程度に、上下関係は影響しないと考えられる。このような集団では、地位はたいした問題ではなく、“誰がやったのか”という行為者自身の属性が迷惑の認知に影響している可能性がある。

仮説 II について

仮説 II は検証されなかったが、上下関係の不明確な集団では仮説通りの結果が得られ、部分的には支持された。研究仮説では言及しなかったが、以下にこの点についての説明を試みたい。

上下関係の明確さや集団サイズは、単独では迷惑認知に直接的な影響を持たないものの、交互作用という形で迷惑の認知に影響していた。すなわち、上下関係の不明確な集団では、小集団の成員の方が大集団の成員よりも迷惑度を強く認知していた。これについては、上下関係が不明確な集団は、集団が個人単位の結びつきを重視するような特徴を持っていると考えられる。集団サイズの小さい方が集団全体の人間関係は密になりやすいと考えるのが自然なので、集団が小さく人間関係が密であればあるほど、ある個人の迷惑行為が集団全体の人間関係に影響しやすい（インパクトが大きい）と考えられる。そして、場合によっては集団成員間の密接な関係を乱すとして、集団から排除される場合もありうる。まれではあるが、当該個人を成員とみなさなくなるような集団の圧力が働くためである (Hollander, 1958)。

しかし、上下関係が不明確でも、集団が大きくなれば別の現象が起こるだろう。集団サイズとその集団内に存在する下位集団の数は比例関係にあるとさ

れている (Blatchiford & Baines, 2001)。このため、大集団では下位集団の数が多くなり、集団の中心人物以外の成員が集団全体を意識することがより困難になってしまう。経営学では span of control という概念があるが、これは一人の管理者が管理・監督できる人数には上限があることを意味する (吉永, 1987)。上限については諸説あるが (工藤, 1991)、集団サイズが大きくなると、集団の中心人物や責任者でさえも集団全体を意識することが困難になる。そして、現実には親しい個人同士で構成された、相互関係のあまりない下位集団の集合体として個人が認知している可能性が考えられる。こうした状況下では、集団全体の活動に影響を及ぼすような迷惑行為でも、集団にとって迷惑なものだと判断されにくいであろう。さらに、迷惑行為を行って、下位集団の人間関係から排除されることはあっても、集団全体から完全に排除されるような圧力が小集団よりもはたらくにくいことが考えられる。こうした理由で、上下関係が不明確な集団では、集団サイズの小さい方が、迷惑は強く認知されると考えられる。小集団では、上下関係の不明確な集団の成員の方が迷惑認知を強くしていたという結果は、このことを裏付けている。

一般に集団サイズが大きくなると、個人的な人間関係が密なだけでは集団を統制することができない。この点については、小集団が大集団や中集団よりも上下関係が不明確であったことから、集団サイズが大きくなると上下関係規範によって集団を統制していると考えられる。集団サイズが大きくなり、個人的な人間関係だけでは集団を統制することができなくなると、誰が集団に属しているのかさえ容易に把握できなくなる。そして、個人が集団にどのような影響を持つのかかわりにくくなる結果、迷惑行為の認知がそれほど強くされなくなるといえよう。ところが、小集団では、前述のように集団から排除される場合を恐れて、迷惑行為そのものがあまり見られないために、たまたま迷惑行為が見られた場合は大集団や中集団以上に迷惑が強く認知される可能性がある。また Markham et al. (1982) が示したように、集団サイズが大きくなると迷惑行為が日常的になってしまい、迷惑に慣れて迷惑を感じなくなった、または単純に把握できないといったことも考えられる。職場集団の逸脱行動を対象にし

た研究では、組織で逸脱行動が頻繁に生起していると、当該組織の成員も逸脱行動を当然のこととらえて自分も逸脱行動をするようになるという知見が得られている (Robinson & O'Leary-Kelly, 1998)。したがって迷惑行為についても、迷惑行為の生起頻度が迷惑度の認知に影響を及ぼす可能性がある。ただし、今回の調査では迷惑行為がどの程度頻繁に見られるかは調査していないため、この点については推測の域を出ない。

一方、上下関係の明確な集団では、集団サイズの大きい方が迷惑行為をより強く迷惑と認知する。しかし、この結果は単純ではなく、上下関係の明確な集団では、中集団の成員が小集団の成員より有意に強く迷惑を認知していたが、大集団の成員は小集団、中集団どちらの成員との間にも迷惑の認知について有意差が見られなかった。すなわち、被害を被る人数が少ない方が、ひとりが認知する迷惑の程度が強いという社会的インパクト理論からの予測が当てはまらない。この理由については次のように考えられる。

集団における規範からの逸脱行為は、多数者の合意を壊すので、集団規範への同調を減少させる (Allen, 1975)。このことから、集団内での迷惑行為は、集団がまとまって活動することを妨げるといえる。また、集団成員間の関係は、役割、地位、そして集団に関連あることについての信念や態度、行為を規定する社会規範や価値を共有することによって、安定し、組織化され、規制される傾向にある (Turner, 1985)。したがって上下関係が明確な集団は、不明確な集団よりも系統だったまとまりを持っているといえる。さらに集団サイズが大きく、上下関係の明確な集団では、ひとりの迷惑行為が、より多くの人間がまとまって活動することの妨げになると考えられる。特に、本研究で作成した迷惑行為の尺度は、集団全体の活動に影響を及ぼす迷惑行為を想定したものであったために、集団サイズが相対的に大きい方が強く迷惑を認知した可能性がある。しかし、大集団については、上下関係が明確であっても人数が多すぎるゆえに、集団全体としてのつながりがゆるく、数多くの下位集団の集合体になっていることが考えられる。このために、大集団の成員による迷惑認知の程度は、小集団の成員とも中集団の成員とも有意差がなかったと考えられる。この結果

からも、中集団や大集団とは違って、小集団では上下関係規範以外の要因の方が迷惑認知により強く影響することが考えられる。

質問紙の最後に設けた自由記述欄に、“先輩にも尊敬できる人とそうでない人がいて、どっちについて答えていいのかわからなくて困った”という記述や、“後輩が誰に対してその行為をするのかにもよります。後輩が先輩に対してやるなら、“なんて失礼なやつなんだ!”と怒りも倍増です”という記述が見られた。これらの記述から、どのような行為者が、誰に対して迷惑行為を行ったのかということや、先輩・後輩に対する役割期待、迷惑行為の行為者がどのような人物なのか、つまり Hollander のいう十分な信頼を得ているような人物なのか否かということや、行為者との親密さ、認知者が行為者に抱いている感情などにも迷惑の認知は影響を受けているものと考えられる。

これまでの迷惑行為の研究は、社会全体に対する迷惑行為 (吉田ほか, 1999; 石田ほか, 2000) や、友人との間で生起する迷惑行為 (小池, 2004) に限られていた。しかし本研究では、特定の集団における迷惑行為の迷惑度認知が、集団の状況的側面や迷惑行為の行為者に影響されることが示された。このことは、集団で生起する迷惑行為の認知には、集団特有の要因が影響することを示唆しており、迷惑行為を理解するうえで、迷惑行為の生起する状況を考慮することの重要性を示しているといえよう。

吉田・元吉・北折 (2000) は、社会考慮という概念を提唱し、それが迷惑の認知に影響するかどうかを検討した。社会考慮の概念は“個人の生活空間を“社会”として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする程度”と定義されており、社会考慮の高い人は行為の種類によっては迷惑を認知しやすく、低い人は迷惑をあまり認知しないということが示された。このような認知者側の個人特性が迷惑の認知に影響があることも無視できない。こうした個人の要因と集団サイズ、上下関係規範の関係についても今後検討が必要である。本研究の問題点としては、上下関係規範と集団サイズの交互作用がなぜ見られたのか、またその結果に関する考察で推測に頼る部分が大きかったことが挙げられる。この点についても、今後の研究で明らかにしていく必要がある。

引用文献

- Allen, V. L. 1975 Social support for nonconformity. In Berkovitz, L. (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 8. pp. 1-43. New York, San Francisco, London: Academic Press.
- Argyle, M. & Henderson, M. 1985 The anatomy of relationships and the rule and skills to manage them successfully. Penguin Books. (アーガイル M.・ヘンダーソン M. 吉森 護 (編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房 pp. 37-60.)
- Blatchford, P. & Baines, E. 2001 Classroom contexts: Connections between class size and within class grouping. *British Journal of Educational Psychology*, **71**, 283-302.
- Hollander, E. P. 1958 Conformity, status, and idiosyncrasy credit. *Psychological Review*, **65**, 117-127.
- Hollander, E. P. 1978 *Leadership dynamics*. pp. 19-44. New York: The Free Press
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 2000 社会的迷惑に関する研究(2) 名古屋大学教育学部紀要(心理発達科学), **47**, 25-33.
- 小池はるか 2004 対人的迷惑行為と共感性との関連(3)一対人的迷惑行為尺度と共感性との関連一 日本グループダイナミクス学会第51回大会発表論文集, 262-263.
- 工藤達男 1991 経営基本管理(増補版) 白桃書房 pp. 75-128.
- Latané, B. 1981 The psychology of social impact. *American Psychologist*, **36**, 343-356.
- Lippitt, R., Polansky, N., Redle, F., & Rosen, S. 1952 The dynamics of power human relations. In Cartwright, D., & Zander, A. (Eds.) 1968 *Group Dynamics* 3rd ed., pp. 236-250. New York, Evanston, and London: Harper & Row Publishers.
- Markham, S., Dansereau, Jr. F., & Altto, J. 1982 Group size and absenteeism rates: A longitudinal analysis. *Academy of Management Journal*, **25**, 921-927.
- Robinson, S. L., & O' Leary-Kelly, A. M. 1998 Monkey see, monkey do: The influence of work groups on the antisocial behavior of employees. *Academy of Management*, **41**, 658-672.
- Turner, J. C. 1985 Social categorization and the self-concept: A social cognitive theory of group behavior. In Lawler, E. J. (Ed.) *Advance in Group Processes*, vol. 2. pp. 77-121. Greenwich, Conn: JAI Press
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **46**, 53-73.
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 2000 社会的迷惑に関する研究(3) 一社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連一 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 35-45.
- 吉永雄毅 1987 経営学要論(新訂版) 税務経理協会, pp. 41-52.

(受付: 2004. 7. 27, 受理: 2005. 2. 10)